「北瀬における諸貨幣流通の再生産的循環基本構圖」と筆者のいり、北瀬における諸貨幣流通の再生産的循環基本構圖」と筆者のいり、北瀬における諸貨幣流通の再生産的循環基本構圖」と筆者のといまり、カラ。本書が目指す方向が「石田モデル」であるならば、筆者のその意味では傳統的な講座派の手法そのものであったといってよいだろう。本書が目指す方向が「石田モデル」であるならば、筆者のとの意味では傳統的な講座派の手法そのものであったといってよいだの意味では傳統的な講座派の手法を問題とに対している。

二九五頁+圖表篇一四九頁 一〇〇〇〇圓一九九七年二月 東京創文社

A五判

## 北村 稔著

本書を讀んで、いま一つ説明が欲しかった點は、

石田が作成した

## 第一次國共合作の研究

―現代中國を形成した二大勢力の出現~

江 田 憲 治

どのような矛盾が内包されていたのか」「その結果どのようにして れは「現代中國を形成した二大勢力」を出現させたのであり、 氏の「實證的研究」を對置することも、本書の特徴の一つとなって ある。また從來の中國や臺灣の研究の政治的偏向を批判し、これに を提起し、以下の七章でこうした問題の解明をめざしているからで 合作は破綻し國共兩黨は內戰を戰うことになったのか」という問題 産黨にあれほど急速な勢力擴大をもたらしたのか」「國共合作には 藤を詳しくあとづける」ことのほか、「なぜ國共合作が國民黨と共 生の政治勢力が、當時の政治的、社會的狀況との閒に繰り廣げた葛 論」でもある。こう述べるのは、氏が本書の「はじめに」で、 集であるとともに、北村氏が多くの意欲的な見 解を 提 起する「史 められた本書は、この第一次國共合作の政治過程を中心とした論文 ることは、誰しも同意しよう。北村稔氏の多年にわたる研究がまと 國近現代史に決定的な影響を與えた」(本書四頁)政治的事態であ 起してから、二四年の中國國民黨の一全大會での正式成立をへて、 二七年の武漢分共に至る五年ほどの短いものにすぎない。だが、そ 第一次國共合作が繼續した期閒は、一九二二年に中國共產黨が提

序章 中國近現代史と第一次國共合作

第二章 第一次國共合作の展開第一章 第一次國共合作の成立

第四章 北伐開始後の第一次國共合作の實態第三章 廣東國民政府における政治抗爭と蔣介石の臺頭

第六章 武漢國民政府の崩壞と第一次國共合作の終焉第五章 蔣介石と共產黨の全面衝突

以下、北村氏が「『會議記錄』などの一次資料を丹念に檢討し、

位置や意義については、石川禎浩氏の書評(『史林』八二卷二號)論の都合上、「序章」は最後に論じる)。なお、本書の研究史上の(はじめに)本書について、紹介と論評を各章ごとに試みたい(行初」と自負し、「『通説』の誤りを數多く正したものと確信」するが、上のとのと確信」するが、上ののとでは、本書が最

\_\_\_

に詳しいのでここでは觸れない。

第一章は、コミンテルンの働きかけで成立した中國共産黨が、前第一章は、コミンテルンの働きないでは對立と妥協の結果で別過程を扱っている。ここで北村氏は、合作本格化における顧問ボロジン(ロシア共産黨派遣)の役割を強調しつつ、ボロジンによるの過程を扱っている。ここで北村氏は、合作本格化における顧問ボロジン(ロシア共産黨派遣)の役割を強調しつつ、ボロジンによる認め、二四年一月の國民黨一全大會で國共合作が正式成立するまで認め、二四年一月の國民黨との合作政策に踏み切り、國民黨(孫文)の者の指導により國民黨との合作政策に踏み切り、國民黨(孫文)の者の指導により國民黨との合作政策に踏み切り、國民黨(孫文)の者の指導により國民黨との合作政策に踏み切り、國民黨(孫文)の過程を表示した中國共産黨が、前第一章は、コミンテルンの働きかけで成立した中國共産黨が、前第一章は、コミンテルンの働きかけで成立した中國共産黨が、前

ただ、この章の、「孫文・ョッフュ共同宣言」(二三年一月)ただ、この章の、「孫文・ョッフュが同意した「共産主義組織あるいはソヴィの、孫文が述べョッフェが同意した「共産黨はコミンテルンから民主主義革命を目標とするよう指示されており、この時點で共産主義組織とであった。だから「宣言」は「共産黨員の活動を否定」とは、不が、「共産黨員の活動を否定する確認」だった(二三頁)とは、不が、「共産黨員の活動を否定」してはいない。北た。だから「宣言」は「共産黨員の活動を否定」してはいない。北た。だから「宣言」が言う「共産主義組織」を共産黨のことだと誤解村氏は、「宣言」が言う「共産主義組織」を共産黨のことだと誤解村氏は、「宣言」が言う「共産主義組織」を共産黨のことだと誤解村氏は、「宣言」が言う「共産主義組織」を共産黨のことだと誤解対氏は、「宣言」が言う「共産主義組織」を共産黨のことだと誤解対氏は、「宣言」が言う「共産主義組織」を共産黨のことだと誤解対氏は、「宣言」が言う「共産主義組織」を共産黨のことだと誤解対氏は、この事が述べていませばいます。

第二章では、當初の廣州政權自體は軍閥を內に抱えた體制であま、とりわけ、軍官學校校長蔣介石がボルシェヴィズムの精神大力、とりわけ、軍官學校校長蔣介石がボルシェヴィズムの精神にもとづき、「國民革命に不可缺な團結した軍事力の養成に懸命」にもとづき、「國民革命に不可缺な團結した軍事力の養成に懸命にもとづき、「國民革命に不可缺な團結した軍事力の養成に懸命にもとづき、「國民革命に不可缺な團結した軍事力の養成に懸命にあった(五六頁)との論點は、北村氏の蔣介石論の核として重要であった(五六頁)との論點は、北村氏の蔣介石論の核として重要であった(五六頁)との論點は、北村氏の蔣介石論の核として重要であった(五六頁)との論點は、北村氏の蔣介石論の核として重要である。

最近の研究によれば、譚平山は二四年一〇月に國民黨內殘留を主張え、彼らの「背後にボロジンが控えていた」とするが(四四頁)、國民黨批判派の二派があったとし、前者に 譚平 山や瞿秋白らを敷なおこの章で北村氏は、共産黨內には國共合作を重視する派と、

や蔣介石が中心人物であったが、廖が暗殺されたため、蔣介石とボ られる。二五年七月に成立した國民政府は主席汪精衞の他、廖仲愷 代表される近年の共産黨史研究の参照が少ないのは残念である。 るから、共産黨の狀況はもう少し複雑である。本書に、楊奎松氏に 校出版社、一九九二年)。また譚は他の場でも國民黨批判をしてい するボロジンと對立、國民黨と手を切って「新たな國民革命の黨を された」、「〔一九日に〕張靜江が中央執行委員會常務委員會主席に介石らにより〕中央執行委員會に主席を設ける案件が提出され承認 計劃説」説を支持する。中山艦事件は「國共合作の軌道修正を狙っ が、北村氏はソ聯人顧問の一人であったチェレパーノフの「蔣介石 中山艦事件が起こる。事件については從來からさまざまな說がある 配できることになった」(九七頁)。そして七月、北伐が始まる。 を押さえ込む諸提案を採擇させるとともに、自派の張靜江を新設の 反共派も排除される。 さらに、 蔣介石は 自分の派閥を形成し始め た蔣介石の示威行爲」であり(九〇頁)、 汪精 衞は追い落とされ、 かも瘠がめざした北伐をめぐり内部對立が深まる中、二六年三月、 しすぎたため、 蔣介石の孤立化と硬直化が始ま」り(六八頁)、 し さらに汪が蔣との連携を缺いたまま「一方的にソ聯や共産黨に接近 ロジン・共産黨員閒の「緩衝物」がなくなったことが指摘される。 つくる」ことまで主張している(楊奎松『中閒地帶的革命』中央黨 委員會主席」選出について、九六~九七頁に、「〔五月一八日、蔣 (九四頁)、同年五月の國民黨二期二中全會では 黨內の 共産黨勢力 - 中央執行委員會常務委員會主席」に選出させ、「國民黨中樞を支 第三章では、孫文死後の抗争でいかに蔣介石が臺頭するかが述べ なお、この二期二中全會における張靜江の「中央執行委員會常務

> として前者毛思誠の「記載を軸に」して述べるのだが、この結果、 員全體會議紀錄」)をともに参照しながら、「若干の脚色といささ 物である毛思誠編『民國十五年以前之蔣介石先生』と、當時の一次 一八日に中執委の主席設置が決められながら、一九日には中執委の かの省略や異同のほかは、事實をありのままに傳える」(九五頁) 資料である二中全會の「會議記錄」(「中國國民黨第二次中央執行委

選出された」とある(傍點引用者)。ここで北村氏は、後年の編纂

中の常務委の主席が設置されたことの理由と意味が説明できていな 料を丹念に檢討した」と自負する北村氏が、 江田「一九二〇年代の民主主義」参照)。「『會議記錄』など一次資 閒直樹編『一九二○年代の中國』〔汲古書院、一九九五年〕所収の で黨規約にない方法で行われたこともわかる(以上については、狹 のか。また「會議記錄」を讀めば、張靜江の選出は蔣介石らの提案 なら次の中央委員會までなのだから、この變更は重要だし、反蔣派 である。しかも中執委主席なら任期は次の黨大會まで、常務委主席 の審査委が一九日、常務委主席設置案を提出、これが採擇されたの ま」の事實を述べていない毛思誠の「記載を軸に」し、二中全會 の抵抗の結果とも考えられる。これも「いささかの省略や異同」な い。實は、二中全會「會議記錄」によれば、中執委主席設置案は 「承認」されてはいない。基本採擇のうえ審査委員會に回され、こ 明らかに「ありのま

の北伐動員令後、軍事と行政の全權力が蔣介石に集中、一三日、

「會議記錄」を充分に利用しないのはなぜか。 第四章が扱りのは北伐開始後の政治過程である。二六年七月一日

ことになった」との指摘とは矛盾するが、見解には贊同できる。本忘れない(一○三頁)。前述の、「(蔣は)國民黨中樞を支配できる「蔣介石一人に集中するものではなかった」ことを指摘することもだし北村氏は、黨權力の實體 は あく まで 中央執行委員會であり、は國民黨の中執常務委主席と政治會議主席(新設)に就任する。たは國民黨の中執常務委主席と政治會議主席(新設)に就任する。た

章は、こうした狀況下の、國共兩黨の路線變更や內部對立の動きを

本業の文書から讚みとろうとする。たとえば、同じ二六年七月、共産黨は「中央擴大執行委員會」を開くが、北村氏はこの會議の「政業の方針はこのとき蔣介石ら國民黨「中閉派」に對する強硬路線から柔軟路線に修正された、そこにはコミンテルン代表ヴォイチンスト柔軟路線に修正された、そこにはコミンテルン代表ヴォイチンス度では中山艦事件後から蔣介石に對する強硬論と融和論が對立しているから、この點についての分析がないのは残念である)。
 しているから、この點についての分析がないのは残念である)。
 しているから、この點についての分析がないのは残念である)。

氏は、要約すれば、とする。だが、この會議について北村會議が開かれることになる、とする。だが、この會議について北村立、ここで「問題解決のステップ」(一一三頁)として國民黨聯席立、ここで「問題解決のステップ」(一一三頁)として國民黨聯席立、ここで「問題解決のステップ」(一一三頁)として國民黨聯席立、正指導者の地位は強化する代わりに黨の支配權は汪精衞に委譲する事指導者の地位は強化する代わりに黨の支配權は汪精衞に委譲する事に、工

びた→④蔣介石は張靜江攻撃で共産黨らに鬱憤をはらさせなが張は聯席會議で反汪の立場をとり、共産黨などからの攻撃をあ介石は共産黨との妥協を張靜江に知らせなかった→③このためで汪精衞復歸問題の對策が協議された形跡がない→②だから蔣①『中央政治通訊』には、聯席會議の前に蔣介石と張靜江の閒

る非凡さを示すものだ、られは彼の權力闘争におけら、權力配置を變化させなかった、これは彼の權力闘争におけ

あり、少なくとも評者には説得力があると思えない。協議がなかったと判斷できるのか。後の議論も、推論の積み重ねでは共産黨の黨内誌である。これに記載がないからといって蔣と張のとの議論を展開する(一一七~一八頁)。しかし、『中央政治通訊』

回任案。衆俱贊成」との記述に注目する。これも議論を要約する日の條の、「有人提議取消主席制、公附議。最後、公自提議請汪速での國民黨史家の見解(ボロジン陰謀説)は閒違っていること、までの國民黨史家の見解(ボロジン陰謀説)は閒違っていること、までの國民黨中央の武漢移轉を焦點に展開される。この會議について、北村氏は毛思誠編『民國十五年以前之蔣介石先生』の一二月七て、北村氏は毛思誠編『民國十五年以前之蔣介石先生』の一二月七て、北村氏は毛思誠編『民國十五年以前之蔣介石の電談に及門されること、この移轉問題府・國民黨中央の武漢移轉を焦點に展開されること、この移轉問題府・國民黨中央の武漢移轉を焦點に展開される。これも議論を要約する

となる。さらに北村氏は、會議後にボロジンが強い態度で出るのは

海の四月十二日事件の直前まで、蔣介石と共産黨は、勞働者武産黨員に極刑をもって臨むなどという考えは全くなかった。上しかし蔣介石には國共合作の破棄を一方的に宣言し、直ちに共

「ソ聯との關係維持」であって、

「國共合作の繼續」ではない。

中全會とその限界露呈までの過程がたどられる。を招集した蔣との對立が公然化、翌年三月の武漢側の國民黨二期三會議を組織して黨と政府の最高職權行使を宣言し、南昌で政治會議合議を組織して黨と政府の最高職權行使を宣言し、南昌で政治會議

やはり質成できない。

> 刑など行われるはずがなかった(一四頁)。 でいる四月十二日事件にさいし上海街頭での共産黨員の公開處の統制下の國共合作の繼續に期待をつなぎ、國共合作の事實上の統統後も、多數の軍事顧問を派遣しているソ連政府との關係の破綻後も、多數の軍事顧問を派遣しているソ連政府との關係の破綻後も、多數の軍事顧問を派遣していた。所介石は自己

た、クーデタ當日周恩來らが無事だったことなどを指摘して論旨を然と始めるのは、四月二五日以降のことだとする(一六六頁)。まの腦裏にあった可能性を指摘し、彼が上海で「共產黨員狩り」を公ソ聯との關係を維持したトルコのケマル・アタチュルクのことが蔣試みた人物」(一三頁)なのである。氏は、共產黨を彈壓しながら

だから、北村氏によれば、蔣介石は「國共合作の繼續を最後まで

補強している。

次に有名な第二六軍の總工會デモ隊銃撃事件(四月一三日)につ

だのに對し、軍には一人の負傷者もなかった(武裝したデモ隊との 側の武装を傳える工部局の資料も指摘し、事件には「偶發性が大き 衝突なら、兵士側にも負傷者が出てよさそうである)。また「書簡」 密集するデモ隊に小銃や機關銃で五、六百發もの銃彈をあびせた。 のデモ隊の行進を第二六軍第二師團司令部の兵士が阻み、寶山路に 北の事件を傳える前記「書簡」によれば、婦人や子供を含む非武裝 いる(『申報』四月一四日)。これも「偶發」事だろうか。また、 は同日、南市でも起こり、死者十數名、負傷者數十名と報道されて いのではないか」とする(一六五頁)。だが、デモ除への軍の發砲 書簡」に留意しながらも(書簡の内容は紹介されないが)、デモ隊 いて檢討したい。氏は、事件を目撃した胡愈之らが公表した「抗議 「書簡」に見える兵士の證言によれば、デモ隊の五、六十名が死ん

私たちが寶山路で目撃した事實の様子であり、 いことは人格をもって保證する(傍點引用者)、 青い短衣の勞働者を捕らえ、路上で射殺した。このことは 〔發砲後〕兵士はまた向かい側の 義品 里の 住居に入り込 一字も虚妄でな

頁)が、 リーフィルムで目にする」路上の處刑はなかったと斷じる(一六五 れば斷固として彈壓する決意だったと考える。氏は「ドキュメンタ 發砲である。しかも、閘北で は 勞働 者が「路上で射殺」されてい をニュース・ソースとするものを除く)によればこれらは一方的な とある。同じ日に二カ所で軍の發砲事件が發生し、證言や報道 とすれば、評者なら蔣介石は當初から共産黨や勞働者が抵抗す 書簡」の路上の射殺はどうなのか。少なくとも、 これら 軍

> 漢「經濟封鎖」への對抗手段と評價される「現金集中政策」を「體 略的退却政策」を問題にし、中國の研究では蔣介石や帝國主義の武 な人物もいる寄り合い所帶だとした上で、「現金集中政策」と「戰 過程をたどる。武漢政府は所謂「左派政權」ではなく、蔣に融和的 を廣く檢討した上で、結論を出すべきではない 第六章は、とりわけポレミックに武漢政府と國共合作が崩壊

する

のよい富の強奪」とし、さらに實は「經濟封鎖など存在しなかっ

とした(一八四、二〇五頁)、食糧確保をめぐる農民と軍の對立は、 の分離をはかったのであり、本格的な彈壓は八月一日の南昌暴動後 の研究者がいう反革命政變はなく、武漢國民黨は平和裡に共產黨と 終焉せざるを得ない(一九九頁)、また國共合作の崩壞時に、 盾」であり、軍の米徴發を共産黨が容認できない以上、國共合作は 兩者とも正當性を主張できたから、これは國共合作の「構造上の矛 も支配確立のためこれを容認したが、この政策は農村を大混亂にお 民運動の飛躍的な發展の要因には土豪劣紳の肅清があり、武漢政府 が、この離反を惹起したのは農民運動だった(一八○頁)、湖南農 た」と断言する(一七〇、一七三~七四頁)。 そして氏は論じる― -武漢政府の崩壞は軍隊の離反から始まった

にもとづき、武漢商人が銅貨での闇商賣か大量の不換紙幣で物資を 現金風潮」(中央研究院『社會科學雜誌』七卷四期、一九三六年) した事實などを指す。が、北村氏は余捷琼「民國十六年武漢的集中 の上海―武漢閒の運航を停止し、上海金融界が武漢との取引を停止 氏が「なかった」とする「經濟封鎖」とは、ふつう汽船會社が長江 しかし、この章でも疑問を提示せざるを得ない。たとえば、

のことだ(二一二~一三頁)、と。

たわけではない」(一七四頁)。 流通し」ていたとして主張する――「武漢は經濟封鎖に晒されていたものの、移出は增加したととを指摘、「武漢・上海閒には物資が購入し上海へ運んだため、二七年四月、武漢への物資移入は激減し

ついてこう述べている。ところが、北村氏が重視する余捷琼論文は、二七年四月の狀況に

鎖】……、こうして武漢は經濟的にまったく閉鎖狀態〔禁錮狀の取引の一時停止を宣言したために、自然に封鎖され〔無形封外國銀行はすべて營業を停止し、內國銀行も上海方面が武漢と

態〕に陷った(傍點引用者)。

ってこないことであり、移入は激滅している(前月の二四%)のだ段」に出たためである。しかも、封鎖がもたらす困難とは物資が入によれば、「商人が物資を〔上海に〕運んで 資 金を 逃避させる手さらに二七年四月の武漢の移出增(前月の一二〇%)も、余捷琼

論文によれば、武漢政府は「申匯」を「設法融通」しようとしてお取引と爲替業務を繼續できなかった(一七三頁)とするが、余捷琼漢では「申匯」(上海爲替)の流通が禁止されたため、上海側は商通」ではなく、「經濟封鎖」の結果であろう。なお、北村氏は、武から、北村氏があげる事實が示すのは、上海・武漢閒の「物資の流ってこないことであり、移入は激滅している(前月の二四%)のだ段」に出たためである。しかも、圭鑓かもたらす医薬とは報資か入

勞働運動の激化による産業停滯から武漢國民政府の軍費供給がへの解答であり、重要な論點である。だが、への解答であり、重要な論點である。だが、起した、國共合作が內包した矛盾と破綻の原因は何か、という課額れが國共合作を崩壊させたとの論點は、北村氏が「まえがき」で提出が國共合作を崩壊させたとの論點は、北村氏が「まえがき」で提出が國共合作を崩壊させた。

農民協會と武漢政府の軍隊が食糧米の確保をめぐって對立し、こ

理は、軍用米の供給をめぐる軍と農民協會の對立を引き起こし軍費を捻出できた。ところが隨所で發生した農民協會の米穀管滯っても、農業國中國の生産基礎は農村にあり各軍は農村から

との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○頁)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○百)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○百)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○百)は、奇妙な議論に思えてならない。軍が軍費との總括(一八○百)は、奇妙な議論に思えてならない。

止できるのか、という疑問が起こる。武漢政府が軍船による護送を上できるのか、という疑問が起こる。武漢政府が軍船による護送を軍船の保護が必要とされた、という二つの事實を國民黨の會議記錄軍船の保護が必要とされた、という二つの事實を國民黨の會議記錄軍船の保護が必要とされた、という二つの事實を國民黨の會議記錄軍船の保護が必要とされた、という二つの事實を國民黨の會議記錄軍船の保護が必要とされた、という二つの事實を國民黨の會議記錄軍船の保護が必要とされた、という二つの事實を國民黨の會議記錄軍船の保護が必要とされた、という二つの事實を國民黨の會議記錄車できるのか、という疑問が起こる。武漢政府が軍船による護送をといる。農民が九江のような都市にまで押し掛けて米の積み込みを阻しる。農民が九江のような都市にまで押し掛けて米の積み込みを阻しる。農民が九江のよりである。武漢政府が軍船による護送をといる。農民が九江のような都市にまで押し掛けて米の積み込みを阻してきるのか、という疑問が起こる。武漢政府が軍船による護送をといる。

必要と考えたなら、船の襲撃を警戒したことになるが、當時の農民

が長江の流れの中の船を襲えたのか。

たい。

Ξ

このように本書を見て來ると、「まえがき」が提起する課題のうた。國共合作の矛盾はどのようなものか、なぜ合作についての、い作が國民黨と共産黨にあれほど急速な勢力擴大をもたらしたのか」作が國民黨と共産黨にあれほど急速な勢力擴大をもたらしたのか、なぜ合作の矛盾はどのようなものか、なぜ合作は破綻したのち、國共合作の矛盾はどのようなものか、なぜ合作は破綻したのち、國共合作の矛盾はどのようなものか、なぜ合作に破綻したのち、國共合作の矛盾はどのようなものか、なぜ合作に破綻したのち、國共合作の矛盾はどのようなものが、なぜ合作になる。

って「國民革命の實現を至上視するストイックな姿勢を、自他ともって「國民革命の實現を至上視することに注目する。「政治と軍事が一體化した力が中國史を新たな方向に 展開させた」のである。そして、評者にはこの「國民黨=ボルシェヴィズムの組織論を採用し」たことに注目する。「政治とボルシェヴィズムの組織論を採用し」たことに注目する。「政治とボルシェヴィズムの組織論を採用し」たことに注目する。「政治とボルシェヴィズム」論は、さる。そして、評者にはこの「國民黨=ボルシェヴィズム」論は、さる。そして、評者にはこの「國民黨=ボルシェヴィズム」論は、さる。そして、評者にはこの「國民黨)の復活をめざす中するコミンテルン・ソ聯政府と、中國に親ソ勢力を築こうと下章で北村氏は、第一次國共合作を、中國に親ソ勢力を築こうと下章で北村氏は、第一次國共合作を、中國に親ソ勢力を築こうと

議論が本書にあって特に重要なものと考えるので、以下に論じてみ揮させた人物」と高く評價されるのであるから。評者はこの二つのに課し」「ボルシェヴィズムに基づく新組織の有效性を十二分に發

しかし、北村氏はこの組織論を「嚴格な規律をもった中央集權」 シェヴィズムの組織論を採用したことはまぎれもない事實である。 石により換骨奪胎された別物ではないか。 事が一體化した力」とは、ボルシェヴィズムとは全く異質な、蔣介 ば、北村氏のいり「中國史を新たな方向に展開させた」「政治と軍 する軍」という原則を守ったか。 どう考えても解答は「否」。 權力掌握は、軍の力で黨權を壓倒した結果である。彼は「黨の指導 う「嚴格な<br />
黨組織と<br />
黨の指導する<br />
軍」のことだったとしても、 者は考えている。かりに、ボルシェヴィズムの組織論が北村氏の言 が、孫文死後の黨內抗爭であり、蔣介石の權力掌握であった、と評 ステム(西山會議派さえ「民主集權制」を主張した)を破壊したの 制)のことである。一時にせよ國民黨がまじめにとりくんだこのシ 國民黨の組織論とは「民主主義的集權制度」(民主主義的中央集權 ン時代のロシア共産黨一九二二年規約にもとづく)。 だから當時の に黨員が從い實行する義務の集權制を規定している(これはレーニ 議・選擧に參與する權利を認めた黨內民主主義と、執行機關の議決 主義的集權制度でなければならない」と述べ、黨員の討議權、決 國民黨一全大會の「規律問題決議」は、「國民黨の組織原則は民主 「嚴格な黨組織と黨の指導する軍」と理解するが、そうだろうか。 まず、「國民黨==ボルシェヴィズム」論であるが、國民黨が ル

- 132 <del>--</del>

(同一二月)との不一致である。「ストイックな姿勢」とは、本書を守ろうとし(同一○月)、廬山 會議で驅け引きをする蔣介石密りの綾きない。充分な資料にもとづく「實證」なきまま、蔣介石密りの綾は、序章が強調する「國民革命の實現を至上視するストイックな姿は、序章が強調する「國民革命の實現を至上視するストイックな姿は、序章が強調する「國民革命の實現を至上視するストイックな姿は、序章が強調する「國民革命の實現を至上視するストイックな姿は、序章が強調する「國民革命の實現を至上視する来介石の姿を守ろうとし(同一○月)、廬山 會議で驅け引きをする蔣介石の姿を守ろうとし(同一○月)、廬山 會議で驅け引きをする蔣介石の姿を守ろうとし(同一○月)、廬山 會議で駆け引きをする蔣介石の姿を守ろうとし(同一○月)、廬山 會議で駆け引きをする蔣介石の姿を守ろうとし(同一○月)、廬山 會議で駆け引きをする東京である。「ストイックな姿勢」とは、本書を守ろうとし(同一○月)、鷹山 會議で駆け引きをする蔣介石の姿をいる。

ば、これらの指摘も書評者の務めであろう。認・誤記が散見される。本書が獲得する多くの讀者のことを考えれ起。本書には資料の誤讀などに起因すると思われる事實の誤

全體が述べる彼の多様な側面と矛盾している。

り。 ・「ヴェルサイユ講和會議」(九頁)→「パリ講和會議」の誤

「ソ聯政府代表ヨッフュ」(二二頁)→當時(一九二二年八

- はマーリンの中國名。「孫鐸」という人名が中國人のように登場(五七頁)→これ月)ソ聯は未成立。
- 聯總領事館。北京にあったのは大使館。「北京のソ聯領事館で會談」(七五頁)→正しくは上海のソ
- ・『整理黨事案』と『國共協定事件〔事項〕』の内容は、第一

頁)→まとめられたのは第一案と第二案。案から第四案までの『整理黨務案』にまとめられる」(九六

・「黨と團〔共產黨と共產主義靑年團〕」(一八四頁)→原文

- 「〔共産黨五全大會の土地問題決議案は〕土地 沒收 という表う用語は當時國民黨も用いた)。の「黨團」は一語でフラクションのこと(この「黨團」とい
- 次の頁で、土地沒收は詳しく論じられている。 現を避けていた」(二○○頁)→北村氏が引用する資料集の

なお論ずべきことはあるが、評者に與えられた紙數も盡きようと している。本書について大小さまざまな疑問點を指摘したのは、そ の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作史研究の水準の一端を示し、「獨自」の國共合作 の日本の國共合作 の日本の國共合作史がことされていると述る。 を自戒しつつ筆をおく。

A五判 二三二頁+六六頁 五二○○圓 一九九八年四月 東京 岩波書店